

Ⅳ. 総合的考察及び課題

本研究に取り組んでから、本年度は4年目にあたり、最終年次を迎えることとなった。全児童生徒の成長・発達を考える時、その根底に共通的な課題として「からだづくり」があると確信し、副題を「からだづくりを通して」と設定して、4年間取り組んできたのだった。

この研究実践の成果について、まずは、児童生徒の変容という立場から述べてみたい。

1つは、具体的な動きのある活動（遊び、遊び的労働、労働）が媒体となる授業がなされ、子どもたちが、よりダイナミックな活動を進んで行うようになってきた。知恵遅れの児童生徒を対象とした授業では行動化を念頭に置いて組織することの大切さが叫ばれるが、まさにそのことが生かされ、児童生徒は活性化してきたと感じられる。

2つめは、単に体位・体格を向上させたり、筋力・持久力を高めたりするからだづくりではなく、児童生徒の発達に即したからだづくりがなされてきた成果として、凹凸、歪みはあるものの全発達のスケールが大きく伸ばされた事を挙げることができる。

3つめは、からだを動かすことを楽しむ児童生徒が、増えてきたということである。授業時間はもちろん、休憩時間等においてもからだを動かす子が増えてきている。

さらに、私たち指導者サイドから振り返れば、次のようなメリットが考えられる。

1つは、からだづくりの根幹的な実践の場である「からだづくり養訓」を発足させたことである。取り組ませる動き、指導のステップ、指導形態、指導法を検討し、積み上げてきたのは意義あることだった。この「からだづくり養訓」は、現在の研究が終ろうとも継続指導していきたいものである。

2つめは、今日まで「からだづくり」に適した題材を厳しく選定するとともに、個の実態に合わせて題材の完成度に幅をもたせ、一人ひとりにとって適度な手ごたえのある課題づくりを考えてきたことである。私たちは、この過程で「授業づくり」について、十分学ぶことができた。

本年度でこの研究を終えるが、残された課題もいくつかある。それらは、①長期的見通しのもとに、着実に積み上げができる指導計画の作成であり、②伸びてくる児童生徒をどのような評価法で評価するかであり、また、③発達のみならず障害に視点をあてた「からだづくり養訓」の充実の問題である。

この研究を締めくくるにあたり、新たな研究テーマの模索が始まるが、残された課題を少しでも充実させつつ、検討していきたいと考える。少なくとも現在において考えられるのは、次の事項である。

1つは、「からだづくり」で行ってきたような、下からの押し上げ教育ばかりではなく、児童生徒の障害（落ち込み部分）に目を向けた直接的なアプローチも必要であるということである。

2つめは、全体的な「からだづくり」のみならず、数・ことばなど認知的な個別学習にも今後力を注いでいく必要があると考えられる。

充実させていきたい事はたくさんあるが、限られた受け皿の中に全てを取り入れていくことは不可能である。この度の研究実践で築きあげたものの良さを忘れることなく、さらに新しいものをバランスよく取り入れ、本校の教育をさらに充実させていきたいものだと考えている。